



ロシアにおける「赤」の変遷について

齋藤, 玲未子

(Citation)

課題研究優秀ポスター, 2026:6

(Issue Date)

2026

(Resource Type)

conference poster

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504976>



ロシアにおける「赤」の変遷について

1 「Красный」

現在のロシア語において、「赤」を表す色彩語であるが、他にも【美しい】【素晴らしい】などの肯定的な意味を持つ。

2 時代と「ロシア」の定義

標準的な区分に則りここでは古代（9世紀後半～13世紀前半）、中世（13世紀後半～17世紀後半）、近代（17世紀末～19世紀）、現代（20世以降～）とする。また、ロシアという国の定義については、研究内容を加味し、第3章第2節を除き「東スラヴ語及びロシア正教を共有する文化圏」とする。

3 中世における「赤」

語源辞典より「красный」が色彩に近い意味を持ち始めたとして最初に確認できるのは14世紀中頃 ノブゴロド人のステファンという人物による『Хождение』の一節

原文「(столи) вельми красен, есть про-чернь и пробелъ」
筆者訳「(卓は) とても美しく、黒と白で彩られている。」
(П.Я. Черных 1993)

15世紀になると...

『Хронограф』より
原文「краснь яко киноварь」
筆者訳「辰砂（の顔料）のように赤い」

『Никоновская летопись』より
原文1「челом ударил архиепископ великому князю... две бочки вина красного да две бочки меду」
筆者訳「大司教は大公に深く礼をし、赤（い）ワイン二樽と蜂蜜酒二樽を献上した。」

原文2「... две бочки вина белого да красного」
筆者訳「... (また、) 白ワインと赤（い）ワインを二樽ずつ献上した」
(П.Я. Черных 1993)

では、【美しい】という意味は消滅したのか？

原文3「Помчаша красныя дьвки половецкыя」
筆者訳「美しいポロヴェツ人の娘たちが駆け出した。」
(Институт русского языка АН СССР 1975)

17世紀にも【美しい】という意味で用いられた用例がある！

中世における「красный」は...

【美しい】の意味を持ち、【赤】の意味と併用されて使用されていたと考えることができる。

現在の赤を表す基本的色彩語（言語の違う様々な民族に共通してみられる基礎的な色彩語）でもあることから、他のスラヴ言語と比べても特殊であると言える（バーリン/ケイ 2016）※。

原文4「~executions were carried out not on this platform but in the adjacent Red Square, which then was called "Lobnaia Ploshchad", See N. Snegirev」
筆者訳「~処刑は、このプラットフォームではなく、当時『Lobnaia広場』と呼ばれていた赤の広場で行われた（N. Snegirev参照）。」（Olearius 1671）

※ポーランド語で赤を表す基本色彩語は「czerwony」、チェコ語では「červená」、いずれも染料に使われた虫に由来するが、ロシア語では暗い赤を表す「червлёный」であり、これは基本色彩語ではない。

定着は17世紀以後

4 成立と美的価値観の関係

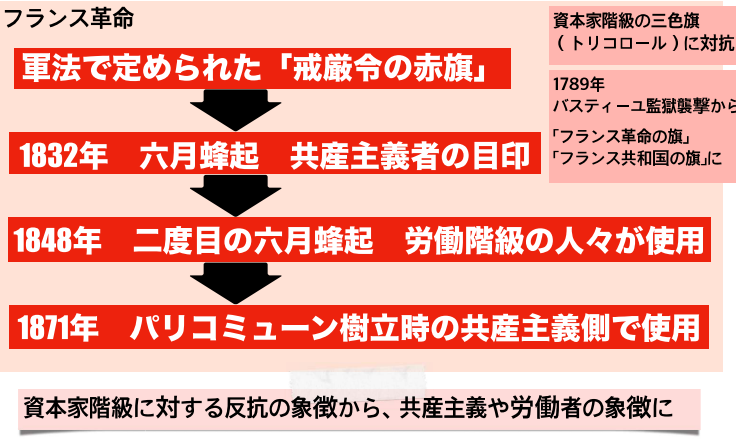
17世紀のロシアの女性たちは、海綿や植物の実、紅檀（こうたん）のチンキ剤などで顔をこすったり、口紅や頬紅としてビーツの煮汁を蒸発させ、頬に塗っていた（Syutkin and Syutkin 2023）

19世紀のセルビアなど南スラヴ民族の間に「女の子が幸福で血色よくあるために、初潮の時に母親はその子の額と眉に月経の血液を少し塗る」という儀式が存在した（Манёв 2023）

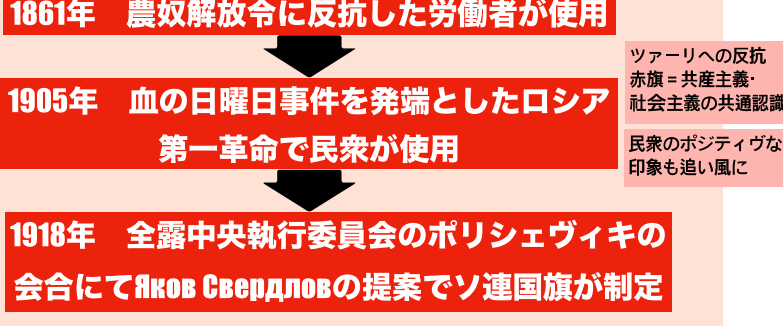
ロシア正教会における「キリストの血」の神聖さ
血色 = 健康的・美しい

5 近代・現代における「赤」

なぜ社会主義・革命の色になった??



ロシア革命



6 昨今の「Красный」のイメージ

先で述べたような共産主義との関係により、近年では「красный」も、特にソ連時代を生きてきた人々にとっては懐古的な意味を持つ場合もある（Bazarbayeva / Yunusov 2024）。
現在もポジティブな意味合いは残っており店名や商品名にも「赤」の入ったものが多い。
例としてКрасный Октябрь（クラスヌイ・オクチャープリ）というチョコレートメーカーや、Красное & Белое（クラスヌエ・ペローエ）という小売店などが挙げられる。

7 結論

元々肯定的な意味を持った「красный」はロシアの美的感覚と融合して【赤】の色彩語となり、その後フランス革命をはじめとした歴史的影響を受け社会主義や共産主義の象徴としても用いられた。加えて現在は、ソ連崩壊によりノスタルジックな感情を想起させる色の意味としても認識される、ロシアの歴史を色濃く反映した、私達がロシアを理解するうえで非常に重要な言葉であると結論付けられる。

8 今後の展望

・他のスラヴ圏との比較
・文学作品などへの影響
・「赤」とは何色なのかなど

参考文献
Adam Olearius. (1671). 『The travels of Olearius in seventeenth-century Russia』 (デジタル版)
Bazarbayeva Alina Mingaliyevna, Yunusova Yulduz Yusuf kizi (2024) "CULTURAL INFLUENCES ON COLOR MEANINGS AND USAGE IN ENGLISH AND RUSSIAN," Encyclopedia Britannica, Red Square <https://www.britannica.com/topic/Red-Square> 最終閲覧日2026/1/16
Pavel and Olga Syutkin(2022)The Moscow times『The Strange Russian History of Beet Make-Up』 <https://share.google/mGQJPGGQ/vvYvCIC06>(最終閲覧日2026/1/16)
Георгий Манёв (2019)ロシアビヨンド『モスクワの赤の広場はどこに誕生したか』 <https://share.google/y8WcY0CndLw0DmX>(最終閲覧日2026/1/16)
Георгий Манёв (2021)ロシアビヨンド『ソ連崩壊について知っておくべきこと』 <https://share.google/y8WcY0CndLw0DmX>(最終閲覧日2026/1/16)
Георгий Манёв (2023)ロシアナビ『赤いE』:ロシアの歴史と文化について』法政大学出版局 日惹 合子訳
Словарь русского языка XXVIII в.в. (辞書局版)
П.Я. Черных (1993) Историко-этимологический словарь современного русского языка: 13560 слов / том 1
朝日新聞出版 編著 坂田 秀全 監修 かみゆり史編纂部 編集(2022)『東欧史』:歴史で学ぶロシアの文化、ロシア史 キエフ大公国からウクライナ解放まで 朝日新聞社
杉村 春彦(2016)『外遊記』と謎の三色旗 <https://share.google/Q0KEn2SuNpHtDRK>
世界遺産オンラインガイド モスクワの赤の広場 <https://share.google/NjKX4XoXWguWmG2> (最終閲覧日2026/1/16)
ブレント・バーン、ポール・クイ(2016)『旗本の色彩学 官職と品位について』法政大学出版局 日惹 合子訳
朝日新聞出版(1992-1993) <https://probeat.kamekura.co.jp/> (最終閲覧日2026/1/16)
株式会社ロシア旅行社(2017)『ロシア正教最大の祭り「バース・ド」』 <https://russia.co.jp/2017/01/paskha/> (最終閲覧日2026/1/20)

参考文献
岩本 純樹 (2016) 赤をめぐって <https://sapporo-u.repo.nii.ac.jp/record/7769/files/SULB00001140.pdf>
京都外国語大学『目のロシアの太陽は赤かった』 <https://share.google/mGQJPGGQ/vvYvCIC06> (最終閲覧日2026/1/16) 杉本 純樹・竹中 幸史 (2015)『旗本のフランス近世史』ミネルヴァ書房
松本 真 (2020)『戦後赤い旗を掲げた日本』読者 世界社
土肥 和之 (2007)『戦後の世界史14 ロシア・ロシア正教の歴史』法政大学出版局
堀井 憲彦 (2020)『一冊でわかるフランス史』